

空き家・空き地の可能性を見出すための10冊

孤立や分断を乗り越え、よりよい社会を築くために、
空き家・空き地はどのように活用できるでしょうか。
今号で紹介した事例の理解を深める10冊を紹介します。



6 『福祉と住宅をつなぐ』 ——課題先進都市・大牟田市職員の実践』

産業衰退と人口減少に悩む福岡県大牟田市で、住宅・福祉部局の壁を越えた実践により地域再生を目指す市の職員たち。その実践をつぶさに綴った本書は、民の動きが目立つなか、自治体の住宅政策はどうあるべきか、空き家活用を含めた住宅セーフティネットの構築に真摯に向き合う最前線の政策論として、ぜひ読んでおきたい一冊だ。

牧嶋誠吾=著
学芸出版社／2021年



7 『まちを変える都市型農園』 ——コミュニティを育む空き地活用』

今や、各地に広がる空き地利用の都市型農園。本書は海外を含む先進事例を通じ、実践に関する多様な論点を取り上げる。農園向けの「まちのスキマ」の見つけ方と転用の知恵、担い手、財源、運営の実際に加え、生活環境改善、住民交流、定住促進、生きがい発見など、持続可能なまちづくりの核となる都市型農園の可能性がわかる。

新保奈穂美=著
学芸出版社／2022年



8 『土地は誰のものか』 ——人口減少時代の所有と利用』

中川氏(30頁)も指摘する通り、空き家・空き地の活用を考える際に不可避なのが、所有権をめぐる問題だ。人口減少が土地の所有・活用にもたらした甚大な影響と、積極的な政策出動の必要性、さらには社会全体の意識改革への期待まで縦横に論じる本書は、今号の特集に力強い実効性を与えるラディカルな内容で、刺激と示唆に富む。

五十嵐敬喜=著
岩波新書／2022年



9 『人口減少と社会保障』 ——孤立と縮小を乗り越える』

厚生労働省の官僚として介護保険の創設にも関わった著者が、人口減少時代に目指すべき社会保障のあり方を示した一冊。高齢単身者、壮年未婚者、ひとり親世帯の増加などによる社会的孤立の増加のほか、居住空間の希薄化といった日本の社会保障の課題が整理される。そのなかで、社会保障基盤としての住まいの重要性にもふれられる。

山崎史郎=著
中公新書／2017年



10 『空き家を活かす』 ——空間資源大国ニッポンの知恵』

各地にあふれる空き家や空きビルは、そのままストックとしての空間資源だ、と著者は言う。本書はそうしたストックで「遊ぶ」という視点から、新たな可能性への挑戦を多数紹介した一冊。取り上げられた事例はいずれも、一度「抜け殻」となった物件が再び花咲くプロセスを通じ、この国がもち得る確かな希望を物語ってくれる。

松村秀一=著
朝日新書／2018年



1 『市民がまちを育む』 ——現場に学ぶ「住まいまちづくり』

市民による自発的なまちづくり、特に居場所・拠点づくり、居住支援、多世代交流、福祉まちづくりなど、「住まい」に関わる事例をキーマンの活動とともに紹介する。「杉本町みんな食堂」をはじめとする事例は、実践へのノウハウやヒントから、それを支える理論も掘り下げられる。

大月敏雄・一般財団法人
ハウジングアンドコミュニティ財団=編著
建築資料研究社／2022年



2 『住まいから問うシェアの未来』 ——所有しえないもののシェアが、社会を変える』

住まいのシェアは、音、匂い、人間関係から責任まで否応なく共有される。煩わしさを伴うが、それは暮らしに豊かさをもたらすものでもあると著者は説く。シェアを基盤に生きるインフォーマル地区の人びとなど、国内外の多様な事例を紹介しつつ、シェア経済の先にある未来を考察する。

岡部明子、鈴木亮平、山道拓人ほか=著
住総研「シェアが描く住まいの未来」研究委員会=編著
学芸出版社／2021年



3 『社協・行政協働型コミュニティソーシャルワーク』 ——個別支援を通じた住民主体の地域づくり』

勝部氏(8頁)が国内で初めて資格を取得したCSW(コミュニティソーシャルワーカー)は、個別の支援活動を通じて住民のつながりを涵養し、誰もが暮らしやすい地域づくりを目指すもの。本書はCSWの成立背景、活動の実際をCSW自身が綴る。地域における新たな支え/支えられる関係を、実感とともに理解できる好著だ。

田中英樹・神山裕美=編著
中央法規出版／2019年



4 『ハウジングと福祉国家』 ——居住空間の社会的構築』

学問としての「ハウジング」は、従来もっぱら建築学が主導していた「住まう」という行為を社会学的な立場から検証しようとする新たな視点。“住宅弱者”が生まれる現実を住宅供給システムのミスマッチと捉え、福祉の枠組みと住宅保有形態の関係から論じた本書は、この分野の「古典」であり、祐成氏(20頁)のすぐれた訳も光る。

ジム・ケメニー=著 祐成保志=訳
新曜社／2014年



5 『集まる場所が必要だ』 ——孤立を防ぎ、暮らしを守る「開かれた場」の社会学』

シニアがゲームに熱中する図書館、親同士のつながりを育む学校、子どもがスポーツを楽しむ警察署など、既存の施設を生かした新しいまちづくり。コミュニティの人びとがオープンに「集まる場所」が、暮らしと健康、安全や命を守るという本書の主張は、「ごちゃまぜ」が地域に活気とワクワクをもたらす佛子園(2頁)の理念にも通じる。

エリック・クリネンバーグ=著 藤原朝子=訳
英治出版／2021年

